

誰もが抱える悩みをパパッと解決！



早稲田アカデミー
教育事業本部副本部長
福田 貴一

先日、電車のなかで私の前に立っていた若い女性が森鷗外の『舞姫』を読んでいた。それ以降、電車に乗るたびに少し注意して周りを見ると、読書をしている方が案外多いことに気が付きました。夏目漱石や太宰治といった古い作品を読んでいる若い方の姿も、何人か目に留まりました。古い文学作品に触れることには、どんな意味があるのでしょうか。今回は、「国語」について考えてみます。

福田貴一先生の 福が来るアドバイス

「国語」という教科

高校で学ぶ「国語」の科目再編

今年の5月中旬、文部科学省が高校の次期学習指導要領で「国語」の科目を再編する方針を発表しました。現行の学習指導要領は、2022年から施行されています。このときには、評論や小説などを網羅的に扱っていた「現代文」という科目が、「論理国語」「文学国語」という二つの科目に分けられたことが話題になりました。しかし、次の指導要領ではこの「論理国語」「文学国語」などの科目を廃止し、科目編成を再度見直すことになったようです。新設された科目が直後に再編の対象になるのは、異例といえるでしょう。

今回の見直しの背景には、生徒の履修状況の偏りがあるといわれています。文部科学省の推しな支障はないでしょう。しかし、そういった教養を若いうちに身につけておくことは、人生を豊かにすることにつながると思うのです。

「国語」は、大学では学ぶことがなくなる科目です。もちろん、言語学や文学の一分野としての「日本語学」「日本文学」は大学でも学べますが、それらを学ぶ目的や意義は、高校までの「国語」とは異なるものだと思います。文部科学省が発表している「これからの時代に求められる国語力について」という文章では、「個人にとっての国語が果たす役割」が次のように説明されています。

『「知的活動の基盤」「感性・情緒等の基盤」「コミュニケーション能力の基盤」として、生涯を通じて、個人の自己形成にかかわる点にあると考えられる』

私が生徒たちに国語を教えたり、保護者の皆様に国語についてお話しさせていただいたりするときには、いつもこのことを念頭に置いています。

短歌・俳句の授業から



「みちのくの母のいのちを
一目見ん一目みんとぞたににいそげる」

中学受験の国語のテキストによく掲載されている斎藤茂吉の短歌です。「母危篤」の知らせを受け、急いで故郷に向かっている……そんな情景を思い浮かべるのは、小学生でもそれほど難しくありません。授業では、情景に加えて「心情」を読み取るように指導をしています。「作

計では、「論理国語」を学ぶ生徒が77パーセントであるのに対し、「文学国語」は49パーセントとなっています。大学入学共通テストの「国語」では、第1問として「論理的文章（評論）」が出題されます。そのため、難関大志望の生徒を中心に「論理国語」の履修率が高くなっており、「文学国語」は低いというのが現状のようです。結果として、「多様な文章に触れる機会が減ってしまった」「文学離れ」という課題が指摘されるようになったのです。この状況を踏まえ、生徒が多様な文章にバランスよく触れられるような科目再編案が示されたのです。

「国語」で学ぶこと

そもそも、学校で「古典」や「文学」を学ぶことにどのような意味があるのでしょうか。「春

者は何を思い、どう感じ、どんなことを考えているのか」といった点を考えさせるわけです。はじめのうち、生徒からは、「急いでいる」「焦り」「心配」「不安」……という言葉が出てきます。「じゃあ、どうしてそんなに急いでいるんだろう?」といったやりとりを重ねることで、その根底にある「愛する母の死」に対する「大きな悲しみ」に気付かせていくのです。

「いくたびも雪の深さを尋ねけり」

この俳句も、テキストによく掲載されています。先ほどの斎藤茂吉の短歌と比べると、作者の心情をつかむのは少し難しくなります。この句を読んだだけで、「辛さ」や「苦しさ」をイメージできる小学生は多くないでしょう。この句を深く理解するには、作者が情景を思い浮かべることも必要ですが、そのためには「作者に関する知識」が必要になってくるのです。

この句の作者は正岡子規です。「子規」というのはホトトギスの異名です。若くして結核を患い咯血をした正岡子規は、「ホトトギスは血を吐くまで鳴き続ける」という中国の伝説から、この雅号を自分につけたそうです。当時、結核は「不治の病」といわれていました。さらに、正岡子規は脊椎カリエスも併発していました。歩くことができなくなり、寝たきりの状態で激痛に耐えながら長い闘病生活を送っていたのです。そういった背景知識があると、この句がつけられた情景がわかります。「雪が降ったのは知っているが、すぐその庭まで見に行くこともできない。何度も何度も家族に『どれくらい積もったかい?』と尋ねている」……そんな情

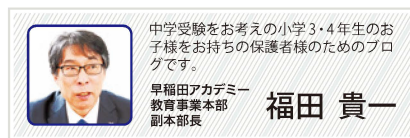


はあけぼの……」や「祇園精舎の鐘の声……」といった古典作品や、夏目漱石や太宰治の小説は、現代の日常生活と直接かわりのあるものではありません。たとえ一度も読んだことがなかったとしても、普段生活をしていくうえで大

景が思い浮かべば、この句に込められた作者の心情が理解できるのではないのでしょうか。

こういった短歌や俳句の学習は、中学校・高校での古典や文学作品の学習にもつながっていくものです。そして、これらの学びで身につく「幅広い知識」「相手の状況・想いを理解しようとする姿勢」は、文部科学省が示す「国語力」とも深くつながっていると考えています。

知識を持つことで理解が深まるのは、国語の学習に限ったことではありません。例えばNHKの「大河ドラマ」や「連続テレビ小説」などを楽しむためには、時代背景や文化、その当時の人々の考え方などに対する理解が必要になってきます。中学受験へ向けて、各科目で学んでいくさまざまな知識は、お子様の世界を広げ、これからの人生を豊かにするために大きく役立つものだと思います。



中学受験をお考えの小学3・4年生のお子様をお持ちの保護者様のためのブログです。

早稲田アカデミー
教育事業本部
副本部長

福田 貴一

著書に『中学受験 身につくチカラ・問われるチカラ』（新星出版社）。ブログでは、学習計画の立て方、やる気の引き出し方、テストの成績の見方、学校情報など、中学入試に関するさまざまなことについて書いています。

詳細はWebをご確認ください。

早稲田アカデミー

検索



左の二次元コードを読み込んでご確認ください

スマートフォンのみ対応